

ジョン・アダムズが照らし出す「もう一つの道」

岡部真一郎

常に注目を浴びる 時事的作品群

去る8月初頭、「ハーモニウム・プロジェクト」が今年のエディンバラ国際フェスティバルの開幕を飾った。ベースとなったのは、アメリカの作曲家、ジョン・クーリッジ・アダムズ（1947～）が合唱とオーケストラのために書いた1980年の作品〈ハーモニウム〉。その演奏にあわせ、歌手たちの脳波などを測定して演奏中の頭や心の動きを探り、それを反映させたデジタル画像を、美しい町の中心部に立つメイン会場の一つ、アッシャー・ホールの外壁に投影するという催し、テクノロジーとアートの融合である。プロジェクトを仕切ったのは、フィリップ・グラス作品などオペラの舞台をはじめ、2012年ロンドン・オリンピックの開会式も手掛けたアーティスト集団「59プロダクションズ」。



ハーモニウム・プロジェクト
 ©Edinburgh International Festival 2015 Photo credit: Eoin Carey

演奏は、創立50周年を迎えたエディンバラ祝祭合唱団と、地元のロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管。この野外イベントには、2万を超える観客が集った。アダムズの名は、しばしば、こうしたビッグ・イベントと共に記憶される。あるいは、逆に、彼の活動は、もう何十年にもわたって、常に、大きな注目を浴び続けてきた。才気煥発の若き作曲家が、内外でさらに耳目を集めるに至る大きな契機となったのは、1987年、ヒューストンで

世界初演されたオペラ〈中国のニクソン〉だった。ピーター・セラーズの演出、マーク・モリスの振付と共に、ニクソンとキッシンジャーの電撃的な北京訪問をテーマとしたまさにその故もあり、このオペラは楽壇を越えた大きな話題となる。さらに、シージャック事件に材を求めた〈クリングホファーの死〉（1991年初演）、そして、原爆開発「マンハッタン計画」の中心人物、オッペンハイマーを主人公とする〈ドクター・アトミック〉（2005年初演）など、アダムズは、現代史に目を向けたオペラを発表する。後者から編まれた〈ドクター・アトミック・シンフォニー〉が、先年、下野竜也指揮の読響により日本初演されたことを思い出すファンも少なくなだろう。アダムズが現代有数のオペラ作曲家であることに異論の余地はなからうが、上述のある種、時事的とも言うべき主題の作品群に加え、さらに彼の舞台作品には、一見、些か趣を異にする系列も存在する。

別の視座による 価値観の普遍化

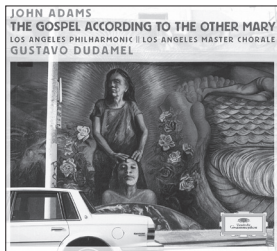
2006年、モーツァルトの生誕250年を祝いウィーンで開かれた記念祭のために委嘱された〈フラワリング・ツリー（花咲く木）〉はその一つだ。モーツ

アルト晩年の名作〈魔笛〉を下敷きとするこのオペラは、南インドの口承の物語をベースに、愛、魔法、試練、そしてそれを乗り越える若い男女をめぐるストーリーを持つ。あるいは、さらに遡り、ミレニアムを記念する国際共同委嘱作品として書かれ、2000年12月、パリで初演されたオペラ・オラトリオ〈エル・ニーニョ〉。アダムズは、演出などを手掛けたセラーズと共に、キリストの生誕を祝う名目で委嘱された作品の舞台を現代のアメリカ西海岸に設定し、貧しいヒスパニックのカップルに聖家族の役割を担わせる。台本は、聖書には直接依拠せず、むしろ、敢えて、非正統的、異端的として排除されたもの、殊に女性の視点から書かれたイエス生誕を綴るテキストを中心に編まれる。そうして組み立てられる「もう一つの道」「別の視座」を通して、ミレニアムの祝祭は、一宗教のみならず、より広く誰にも直接結びつくものへ、イエスの生誕は、われわれ一人一人が命を授かりこの世に生まれたという奇跡へと、変容を遂げ普遍化する。多極化し、異なる価値観の衝突が幾多の問題と悲劇を生む現代の世界において、それは多文化主義の理想へと繋がっていく。グスターボ・ドゥダメルとロサンゼルス・フィル（LAPO）のために書かれた近作〈もうひとりのマリアによる福



イングリッシュ・ナショナル・オペラにおける〈福音書〉舞台初演の様子
©Richard Hubert Smith

音書 The Gospel according to the other Mary〉は、オペラでもありオラトリオでもある、というかたちのみならず、内容面からも、〈エル・ニーニョ〉と対を成す姉妹作である。因に、ここに言う「もうひとりのマリア」とはマグダラのマリアのことだ。その初めての本格的舞台上演が行われたのは、昨年末のロンドン。演出は、もちろん、作品の成立に深く関わってきたセラーズだった。



ジョン・アダムズ／The Gospel according to the other MaryのCD（ドゥダメル指揮、グラモフォン4792243）

全作品に共通する音楽的特質

この「もう一つの道」は時事的作品

にも同じく見出される、二つのグループに通底する大きな柱とも言える。それがアダムズの芸術の本質にどのように根差すものかについては、より慎重に考えるべきかも知れない。ただし、一つ確かなのは、アメリカ東海岸、ニュー・イングラン

ドに生まれ育ち、ハーバードに学び、西海岸に移り住んで今日に至る彼にとって、いわゆる「伝統」、あるいはそう信じているものがみずからの依って立つところに極めて大きい存在であると同時に、一方、そこに別の角度からの光を当てることこそ、70年近くに及ぼんとする彼自身の歩みの根幹を成してきたという点だ。

そしてこれは、これまで挙げてきた舞台作品はもとより、管弦楽曲や室内楽など、他のジャンルにも共通するアダムズの音楽的特質だ。今回、取り上げられる初期の代表作の一つ〈ハルモニレーレ〉でも、そのホ短調とホ長調が、聴き慣れたもののようにいて、しかし、誰もが知る機能和声、調性の音楽とは全く異なる地平を開くものであること、あるいは、シベリウスやマーラーへの参照、等々を通し、既知なるものから浮かび上がる「もう一つの道」は強く実感されるところだろう。

そして、まさにそれこそが、彼の音楽への高い評価に大きく関わる場所とも見える。良く知っているはずのものが全く新しい輝きを発する。新たな創造が、奇を衒うことなく、むしろ音楽の本質に深く根差して展開される。

世界中で演奏される現代音楽の大家

多くのビッグ・プロジェクト、あるいはビッグ・ネームとアダムズの音楽が結びつき、そして彼自身が押しも押されぬ大家となって久しいのも、戦略やマーケティングなどの表層にのみ帰すべきところでは決してない。

何より、その耳当たりの良い外観とは裏腹に、彼のスコアは極めて精緻かつ厳格だ。寸分の狂いも許されない演奏は、至極困難、ハードルは高い。

それでも、指揮者としても活躍するアダムズ自身のタクトの下のみならず、多くのアーティストたちが挙げて、彼の作品を演奏する。サイモン・ラトルは、バーミンガムにおいて、積極的に同時代音楽に取り組むなか、アダムズを折に触れて演奏し、〈ハルモニレーレ〉など、レコーディングも行った。その様子はドキュメンタリーにもなっている。時を経て、上述の〈フラワリング・ツリー〉のウィーンでの初演の折、作品が輝かしく閉じられ、会

場が拍手に包まれるなか、「凄い力を持った音楽だね」と大きな感慨がそのまま溢れ出たかのようにつぶやいた彼は、その後、ベルリンで、作品のドイツ初演を自身の手で行ったのだった。

ケント・ナガノは、1986年、サントリーホールオープニング・シリーズに客演して新日本フィルを振った若き日、マーラーと共にアダムズを既にプログラムに組んでいた。そして2000年、パリで〈エル・ニーニョ〉世界初演のタクトをとったのも、彼だった。

LAPOのポストに永年あったエサベッカ・サロネンの棒と同じ〈エル・ニーニョ〉を聴いたのは、彼の地の陽光が燦々と降り注ぐクリスマスの時期。アダムズの本拠たるアメリカ西海岸での状況は、言うに及ばずか。ドゥダメルがこの西海岸の名門の音楽監督に迎えられた折、就任記念演奏会のために書き下ろされた〈シティ・ノワール〉は、先頃の彼らの来日公演でも演奏された、言わば「名刺代わり」の管弦楽曲だし、〈福音書〉が彼らのために作曲されたことも、既に触れた通りだ。

「この道しかない」のか否かはともあれ、「もう一つの道」に光を当て、本質を鮮やかに照らし出してみせるアダムズを今、東京で改めて聴く意義は、思いの外、大きいのかも知れない。

（おかべしんいちろう・
音楽学者・評論家／明治学院大学教授）

◎ソロ・ヴィオラ奏者

鈴木康浩

Yasuhiro Suzuki

弾けば弾くほど心に響く ヒンデミットの音楽

「読売日本交響楽団がヒンデミットの『白鳥を焼く男』を取り上げるのは、1990年4月、^{ひろふみ}深井碩章さんのソロ以来。なかなか聴く機会がない曲です」

僕も今回初めてこの曲を弾きます。ヴィオラ協奏曲というと、ヒンデミットのこの曲をはじめ、バルトーク、ウォルトンなど数が少ない。ヴァイオリン協奏曲のように派手ではないし、甘くて愛を歌うという点ではチェロ協奏曲にはかなわない。ヴィオラという楽器の特性を反映して、^{ほくとつ}朴訥としてゆっくり語るような、なんとなく心に沁みわたるような音楽が魅力だと思います。目立ちたいと自分を出し過ぎるとヴィオラ協奏曲じゃなくなる感じもする。今回は、読響の仲間が僕を前に押し出してやろうと、そして指揮者も下野さんだし、息の合った演奏ができるのではないかな。

「ヒンデミット自身、ヴィオラの名手でした。実際に『白鳥』を弾いてみて、それを感じますか」

バルトークの協奏曲より『白鳥』が好きですが、その理由の一つは、オーケストレーションの面白さです。普通の協奏曲よりも編成がずっと小さい。オーケストラにヴァイオリン、ヴィオラがないから、ヴィオラの音がより聞こえやすいのです。一方で、他の楽器が出てきてヴィオラが埋もれてしまうところもある。そういう意味で室内乐的でもあります。

もう一つは、音色ですね。第1楽章は「山と深い谷の間で」という題がついていますが、無伴奏で始まって、自然の風景のイメージが彷彿としてきます。^{ほうふつ}第2楽章の出だしのソロはハーブと絡むのですが、ヴィオラが一番いい音が出るように書いている。ヒンデミットは不協和音も使います。不協和音がもたらす緊張感や厳しさ、不快な感じなども、音楽の一つのカラーとしてとらえている。何もきれいなものだけを表現したいわけじゃないというのを感じられるのでは。

「ヒンデミットは、バルトークやストラヴィンスキーと同時代の作曲家ですが、日本ではあまりなじみがないだけにとっつきにくい感じもします」

この曲の素晴らしさを一度で伝えるのは難しいかなと思います。バルトー



ベルリン・フィルハーモニー公演での鈴木さん（3月2日） ©Peter Adamik

ク、ストラヴィンスキーはリズム感がいい作曲家なので体感という意味で親しみやすいですが、ヒンデミットは演奏家でもあったのでちょっと違う。演奏家の作る音楽は、弾けば弾くほど深みを感じるし、心にも響いてくる。音楽との対話があって演奏しがいがあるし、面白い。練習していると時間があっという間になっていくんです。ヒンデミットの音楽と僕らが表現したい音楽がマッチしたものを、客席でも楽しんでいただければうれしいです。
「鈴木さんは新潟生まれで、5歳からヴァイオリンを始めた。桐朋学園大学

を卒業後、ヴィオラに転向。ベルリン・フィルの契約団員などを経て、2006年に読響に入団。「ヤス」と呼ばれて親しまれている」

ヴィオラというのは、オーケストラの中で目立たないがゆえに、表現する気持ちを持続させるのが難しい楽器です。たとえば歌謡曲で歌詞つきのところは歌えるけど、その他の楽器の部分はわからないでしょう。メロディー以外の部分を楽しく歌える人はそんなにいないと思うけど、読響のヴィオラはみんなできる。目立たないところにどういうキラメキをもたせるか、そんな点に面白さを感じるメンバ

ーで、とても一体感があります。

指揮者のイエスマンにはなりません。指揮者はメロディーラインを歌い始めると彼自身のテンポ感が狂うことがある。そんな時、内声からすると今はそういうテンポじゃない、とヴィオラ側から演奏で指摘することがあります。これは、ヴィオラの職人的に必要なことだと考えています。

オーケストラの中で、ヴィオラとコントラバスは似た役割です。ヴァイオリンとチェロを「陽」とすると、ヴィオラとコントラバスは「陰」。縁の下の力持ちの存在は大切なんですよ。

古典派を得意とする菊池が、木管楽器の名手達と共演！

11/5 (木) 19:30 第8回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《菊池洋子×読響の室内楽》

モーツァルト：歌劇《魔笛》序曲（木管五重奏版）

：ピアノと管楽のための五重奏曲 K.452

ベートーヴェン：ピアノと管楽のための五重奏曲

ピアノ：菊池洋子 フルート：一戸 敦 オーボエ：蠣崎耕三

クラリネット：金子 平 ファゴット：井上俊次 ホルン：松坂 隼



菊池洋子

名匠ヴァンスカが登場。実力派ラ・サールが人気曲を弾く

11/20 (金) 19:00 第19回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール **完売**

11/21 (土) 17:00 第12回 大阪定期演奏会
ザ・シンフォニーホール (大阪) **完売**

シベリウス：交響詩《フィンランディア》

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番

シベリウス：交響曲 第2番

指揮：オスモ・ヴァンスカ ピアノ：リーズ・ドウ・ラ・サール



オスモ・ヴァンスカ

シベリウスの生誕150周年を祝して贈る《名曲選》

11/27 (金) 19:00 第586回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

11/28 (土) 14:00 第181回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：《カレリア》組曲、ヴァイオリン協奏曲、交響曲 第1番

指揮：オスモ・ヴァンスカ ヴァイオリン：エリナ・ヴァハラ



エリナ・ヴァハラ

神秘の宇宙。シベリウス・イヤーを締めくくる後期交響曲

12/4 (金) 19:00 第553回 定期演奏会
サントリーホール

シベリウス：交響曲 第5番、交響曲 第6番、交響曲 第7番

指揮：オスモ・ヴァンスカ



オスモ・ヴァンスカ

11月～12月4日 公演の聴きどころ

11月5日は、501席の親密な空間で室内楽を堪能できることで人気の《読響アンサンブル・シリーズ》公演。モーツァルト国際コンクールの覇者・菊池洋子が登場し、瑞々しいピアノで読響の木管首席奏者と極上のアンサンブルを繰り広げる。モーツァルトとベートーヴェンの五重奏曲は、室内楽史に燦然と輝く傑作。奥妙な表現力と精緻なアンサンブル力が求められる二つの傑作をどう聴かせてくれるのか、興味は尽きない。

11月中旬から12月初旬にかけては、フィンランドの名匠オスモ・ヴァンスカが来日し、今年が生誕150周年のシベリウスの名作を次々と取り上げる。ヴァンスカは、既に2回も交響曲の全曲録音を行っているシベリウス演奏の大家。20日と21日は、人気の交響詩《フィンランディア》と交響曲第2番を披露。金管が咆哮し、心に響く圧倒的なクライマックスをご堪能いただきたい。欧米で熱い注目を浴び、ウィーン響やベルリン放送響と共演したフランスの新星リーズ・ドウ・ラ・サールも登場。フィギュア・スケートやテレビでおなじみの人気曲、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番で、強靱な打鍵と軽やかなリズムを駆使して、会場を熱狂へと導くだろう。

27日と28日には、シベリウスの《カレリア》組曲、ヴァイオリン協奏曲、交響曲第1番の3作品が披露される。協奏曲では今シーズン、地元の雄、フィンランド放送響の定期公演でも同曲の独奏を務める名花エリナ・ヴァハラが共演する。ヴァハラは12歳でラハティ響と共演して鮮烈なデビューを飾り、ヴァンスカから「ヤング・マスター・ソロイスト」に選ばれた逸材。以後さまざまな名門楽団と共演を重ねている。フィンランド出身の二人が生み出す“お国もの”の強みに、期待したい。

12月4日の定期では、シベリウスの後期交響曲3作品を一挙に演奏。ヴァンスカは、これまでに読響で何度もシベリウスを振っているが、交響曲第6番と第7番は今回が初となる。ファン必聴のプログラムだ。（文責：事務局）

読響チケットWEB

検索

ドイツで活躍する名匠・上岡が振るベートーヴェン〈第九〉

12/18(金) 19:30 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール ※19:00からプレ・コンサート

12/19(土) 14:00 第182回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/20(日) 14:00 第84回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

12/22(火) 19:00 第587回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

12/24(木) 19:00 第5回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

12/25(金) 19:00 第20回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/26(土) 17:00 第13回 大阪定期演奏会
ザ・シンフォニーホール(大阪)

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮：上岡敏之

ソプラノ：イリーデ・マルティネス

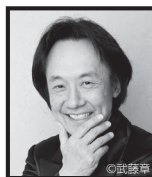
メゾ・ソプラノ：清水華澄

テノール：吉田浩之

バリトン：オラファ・シグルザルソン

合唱：新国立劇場合唱団

合唱指揮：三澤洋史



上岡敏之



イリーデ・
マルティネス



清水華澄



吉田浩之



オラファ・
シグルザルソン

名匠ボーダーの〈新世界〉で、新年が華やかに幕開け！

1/7(木) 19:00 第588回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

1/9(土) 14:00 第183回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉
第1幕への前奏曲

ヒナステラ：ハープ協奏曲

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ミハエル・ボーダー

ハープ：グザヴィエ・ドゥ・メストレ



ミハエル・ボーダー



グザヴィエ・ドゥ・メストレ

オペラを得意とする名匠が振る後期ロマン派の傑作〈人魚姫〉

1/14(木) 19:00 第554回 定期演奏会
サントリーホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・ファン〉

リスト：ピアノ協奏曲 第2番

ツェムリンスキー：交響詩〈人魚姫〉

指揮：ミハエル・ボーダー

ピアノ：フランチェスコ・ピエモンテージ



ミハエル・ボーダー



フランチェスコ・
ピエモンテージ

92歳を迎えた巨匠による特別演奏会《究極のブルックナー》

1/21(木) 19:00 特別演奏会《究極のブルックナー》
東京芸術劇場コンサートホール

1/23(土) 14:00 特別演奏会《究極のブルックナー》
東京オペラシティ コンサートホール

ブルックナー：交響曲 第8番

指揮：スタニスラフ・スコロヴァチェフスキ



スタニスラフ・
スコロヴァチェフスキ

日本屈指の実力派・小山実稚恵らの究極のアンサンブル

1/27(水) 19:30 第9回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

シューベルト：ピアノ五重奏曲〈ます〉ほか

ピアノ：小山実稚恵 ヴァイオリン：小森谷巧、長原幸太

ヴィオラ：鈴木康浩 チェロ：毛利伯郎 コントラバス：石川 滋



小山実稚恵

首席客演指揮者・下野竜也が名曲〈悲愴〉で渾身のタクト！

1/29(金) 20:00 第12回 読響カレッジ
文京シビックホール ※19:30から解説

チャイコフスキー：交響曲 第6番〈悲愴〉

指揮：下野竜也

ナビゲーター：中井美穂



下野竜也

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

盛岡公演

■ 10/6 (火) 18:30 岩手県民会館

指揮：下野竜也 ピアノ：小山実稚恵

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番 ベートーヴェン／交響曲第6番〈田園〉

[料金] S ¥7,500 A ¥6,500 B ¥5,000 C ¥3,000

[お問い合わせ] 岩手県民会館事業課 019-624-1173

東京芸術劇場シアターオペラ vol.9 (全国共同制作プロジェクト)

■ 10/22 (木) 18:30、10/24 (土) 14:00、10/25 (日) 14:00

東京芸術劇場コンサートホール

指揮・総監督：井上道義 演出：野田秀樹

出演：ナターレ・デ・カロリス、テオドラ・ゲオルギュー、小林沙羅、大山大輔 ほか

合唱：新国立劇場合唱団

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉～庭師は見た!～ 新演出

(全4幕・字幕付 原語&一部日本語上演)

[料金] SS ¥12,000 S ¥10,000 A ¥8,000 B ¥6,000 C ¥4,000 D ¥3,000
E ¥1,500

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296

日本テレビ「読響シンフォニックライブ」 公開録画

■ 10/29 (木) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：久石譲 コントラバス：石川滋 ソプラノ：森谷真理 ほか

合唱：武蔵野音楽大学合唱団、東京少年少女合唱隊

久石譲／コントラバス協奏曲(日本テレビ委嘱作品・世界初演)

カール・オルフ／カルミナ・ブラーナ

[お問い合わせ・詳細] 「読響シンフォニックライブ」ホームページ

<http://www.ntv.co.jp/yomikyo>

[応募締切] 10/3 (土) 当日消印有効

NISSAY OPERA 2015 〈ドン・ジョヴァンニ〉

■ 11/14 (土) 14:00、11/15 (日) 14:00 日生劇場

指揮：広上淳一 演出：菅尾友

出演：加未徹、斉木健詞、中江早希、金山京介、林美智子 ほか (14日)

池内響、峰茂樹、宮澤尚子、望月哲也、柳原由香 ほか (15日)

合唱：C. ヴィレッジシンガーズ

モーツァルト／歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉(全2幕／原語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000 学生 ¥3,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111